

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## アメリカ映画を観よう：人権関連場面の案内(その1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 広一 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	<a href="https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5746">https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5746</a>

## アメリカ映画を観よう —人権関連場面の案内（その1）—

岡田 広一

### 1. はじめに 映画のなかの人権問題

アメリカ合衆国を舞台にした映画を、アメリカの人たちと一緒に見ていると、彼らがある場面でスクリーンに向かってうなずいたり、突然、笑い出したりしたとき、ネイティブではない我々は、なぜこのシーンでアメリカ人の観客が、そのような反応をしたのか理解できないことがある。それは、映画の登場人物たちが話している言語を理解しているかどうか、という問題の他に、その作品の舞台となった街や村、そこで描かれている人々の生活、そして文化背景や時代背景などに関する知識がないために、彼らと同じようには共感できないことに問題がある。アメリカ映画をより良く理解し、より楽しむためには、たくさんの映画を観てたくさんの疑問に出会い、その疑問を解明するためにアメリカ合衆国の文化や歴史を知ることが大切である。

アメリカ合衆国の歴史は、自由と平等、そして民主主義を守るための戦いの歴史であるといえよう。アメリカ映画には、自由・平等・民主主義の重要性と、それらを実現するための先人たちの苦労と努力が繰り返し描かれてきた。しかし、実際の歴史のおもな主役は、アメリカ合衆国の建国時に、政治・経済・文化・宗教などの分野で権力を握ったヨーロッパ系アメリカ人、特に WASP（White Anglo-Saxon Protestant）と呼ばれる、アングロサクソン系・白人・新教徒の人たちであった。そして、アメリカ合衆国の歴史は、先住民民族に対する侵略と奴隷制という側面も持っており、アメリカ映画には人種や民族の違いによる差別、貧富の差、信教・表現・恋愛の自由などに関するさまざまな人権問題も描かれている。人種差別撤廃を求めた戦いを正面から取り上げた作品だけではなく、アメリカ人の日常生活を描いた多くの映画のなかにも、物語を構成している小さなエピソードとしてさまざまな人権問題が

描かれていることに気付く。

ここでは、アメリカ合衆国を舞台にした映画4作品とテレビ番組1作品を取り上げ、それらの作品に描かれている年代順に、そのストーリーを簡単に解説し、その作品に記録された差別などの問題とその時代背景を指摘する。そして、登場人物のせりふや感情表現、音楽や小道具などによって描かれた人権問題を考察することにより、これらの作品に記録され、今日でも解決されていない差別などアメリカのかかえるさまざまな人権問題について考える一助としたい。

## 2. *The Last Samurai* (『ラスト・サムライ』2003年)<sup>1</sup>の Captain Nathan Algren (ネイザン・オルグレン大尉) の悪夢

*The Last Samurai* の主人公 Captain Nathan Algren (ネイザン・オルグレン大尉) は The American Civil War (「南北戦争」1861~65) の英雄であった。彼は United States Army (アメリカ合衆国陸軍) の大尉として南北戦争に従軍し、最後の決戦となった Pennsylvania 州南部の Gettysburg (ゲティズバーグ) の戦い (1863年) などで戦果を上げた。1861年、Abraham Lincoln (1809~65) は、黒人奴隷を解放し、アメリカの市民として認めることなどを公約にして大統領に選ばれた。しかし、奴隷の労働力に依存していた農場の多い南部諸州は、Lincoln を大統領と認めず、Jefferson Davis (1808~89) を大統領とする Confederate States of America (アメリカ南部連合国) を建国してアメリカ合衆国から分離独立した。南北戦争は、この Confederate States of America を、反乱軍とみなして倒すことが正義であると考えられた戦いである。

明治の日本政府は Algren 大尉を軍事顧問として雇う。新しい時代が到来しても鬻を落とさず、刀を手放さず、侍として生き続けることを選んだ人々を反乱分子とみなして討伐するための軍隊を養成させるためであった。Algren 大尉が日本へやってくるのは1876年となっている。1877年には、西郷隆盛 (1827~77) らを中心に、明治政府に不平のある士族たちの最後の反

乱である西南戦争が起こっている。<sup>2</sup>

San Franciscoから太平洋を越えてやって来たAlgrenは、まもなく横浜港へ到着する船の中でスーツケースを開いて軍服を取り出し袖を通そうとする。その時、Native Americans（アメリカ先住民）の人たちの住む村が燃え、村人が逃げ惑う光景の記憶がよみがえる。陸軍騎兵隊に所属していたAlgrenは、Cheyenne（シャイアン）の人々の村を襲い、女・子供も含めてすべての村人を殺した戦いを経験していた。この場面は、1868年Oklahoma州西部Washita河畔川で、Lieutenant Colonel George Armstrong Custer（カスター中佐1839～1876）率いる第7騎兵隊がCheyenneの人々の村を攻撃して殲滅した The Battle of Washita（ウォシタの戦い）をイメージして描かれている。

南北戦争が終わり、統一されたアメリカ合衆国は西部開拓を進めてゆく。大平原に鉄道を敷設し、草原を農地や牧場に変えてゆく。しかし、その土地はもともと先住民のものであり、彼らは自分たちの土地を守るために開拓者たちを敵とみなすようになった。先住民たちは、開拓者たちを襲う野蛮な敵であり、取り除かれるべき障害と考えられた。しかし、先住民の言語を学び、その習俗を記録して本にまとめていたAlgren にとっては、先住民の人たちは決して野蛮人ではなく、アメリカ合衆国の発展を阻む障害でもなかった。Algren は、物語のはじまりに、San Francisco で Winchester社のライフル銃の宣伝をしているとき、酒瓶を手にした姿で登場する。上官の命令に従って先住民殲滅にかかわったという過去のトラウマを忘れようとして、アルコール依存症になっていることが理解できる。

明治天皇は「アメリカにはもともとそこで暮らしていた民がいると言うが直接戦ったことはあるのか」と尋ねた。Algrenの上官であった Lieutenant Colonel Bagely（バグリー中佐）は、先住民を“red man”（赤い人）と呼び、“The red man is a brutal adversary”（「赤いやつらは残虐な敵です」）と答えた。明治天皇が「オルグレン大尉に訊きたい。彼らは戦の前に鷲の羽で飾り、顔に色を塗ると言うが、ほんとうか。恐怖心はないのか」と尋ねたとき、Algren の答えをイギリス人通訳 Simon Graham（サイモン・グレアム）

は「彼らはとても勇敢でした」と訳した。Algren の言ったのは “They are very brave” であった。Algren にとって先住民たちは過去の存在ではなく、現在も誇り高く生きている人々である。Algren の返答を聞いた天皇は玉座から外へ出て初めて顔を現し、“Thank you very much” と、ひとことひとこと丁寧に言って、再び玉座に戻り、帳の影に顔を隠した。Algren ならば、天皇の師であり、明治維新のために戦い、今では反乱軍の指導者の扱いを受けている勝元盛次を、勇敢で名誉ある侍と認めて戦ってくれるだろうと考えたようだ。

### 3. *The Majestic* (『マジスティック』2001年) 冒頭の1951年のニュース映画場面

*The Majestic* の主人公 Peter Appleton (ピーター・アップルトン) は Hollywood 映画の駆け出しの脚本家である。*The Majestic* は、Peterが脚本を書いた映画 *Ashes to Ashes* (『灰は灰に』) の制作会議のシーンで始まる。会議に出席してはいるが、自分の意見を言うことなく沈黙しているPeter を無視して、プロデューサーや監督らが意見を出し合い、登場人物の名前や設定、そして物語の結末までもが変えられてゆく。最後に意見を求められたPeter は、“Well, that’s amazing.” (「それは、すばらしいですね」) としか言えなかった。

続いての場面で、Peterは、はじめて脚本を手がけた「B級」映画が封切られるのを、恋人であり映画の主演を演じた Sandra Sinclair (サンドラ・シンクレア) とともに Hollywood の中心にあるGrauman’s Chinese Theatre (チャイニーズ・シアター) で観ようとしていた。売店で買ったポップコーンなどをかかえた Peter が、観客をかき分けて Sandra の待つ座席へと向かうとき、スクリーンには映画上映前のニュース映画が始まっている。それは、The Hollywood Ten (ハリウッド・テン) と呼ばれたプロデューサー・監督・脚本家など10人の映画人が、1947年に House Committee on Un-American Activities (連邦下院非米活動委員会) に召還され、共産主義者であるか、

反米的活動をしたかなどの質問をされて、証言を拒否したため、議会侮辱罪で投獄されたニュースであった。

1940年代後半から1950年代にかけて、アメリカ合衆国では Joseph R. McCarthy（マッカーシー共和会上院議員 1908～57）らによる極端な反共運動、いわゆる McCarthyism（「赤狩り」）が行われていた。中華人民共和国の成立（1949）に続いて、朝鮮戦争（1950～1953）が勃発し、ソヴィエトとの冷戦状態が深刻化する時代にあつて、アメリカ合衆国内での共産主義に対する警戒が高まり、連邦政府や州政府の政治家から民間人にいたるまで、反体制的な人物に対する捜査・摘発が行われた。その矛先は映画やテレビ・ラジオの関係者にもおよび、アメリカ合衆国政府を批判するような言動があると、共産主義との関係を疑われてブラックリストに載せられ、仕事を奪われていた。

Peter は政治には特に興味を持っておらず、もちろん共産主義者などではなかった。彼は University of California at Los Angeles（カリフォルニア州立大学 ロサンゼルス校）の学生時代に、“Bread instead of Bullet Club”（「銃弾よりもパンをクラブ」、日本語字幕では「戦災地救済部」）の集会に参加していた。当時の彼は、クラブに気になる女性がいて、彼女といっしょにいたかった、というだけの理由でそのクラブに参加していた。それが今になって、そのクラブが共産主義的活動をしており、その会員名簿に名前があったのでPeter も共産主義者であるという疑いがかけられていた。

非米活動委員会の捜査官 Elvin Clyde（エルヴィン・クライド）は、押収した *Ashes to Ashes*（『灰は灰に』）のシナリオの内容が、1920年代の West Virginia 州での炭鉱のストライキをテーマにし、虐げられた労働者の苦境を扱っているという理由で、共産主義のプロパガンダだと言い、Peter を共産主義者であると決め付けた。Peter は事故にあつて記憶を失い、見知らぬ町にたどり着く。しかし、彼を探しているFBIの捜査官たちは、Hollywood から姿をくらましたPeter のことを、1950年に原子爆弾の設計資料をソヴィエトに渡した容疑で逮捕され死刑判決を受けたユダヤ系のアメリカ人、Julius Rosenberg（ジュリアス・ローゼンバーグ1918～53）、Ethel Rosenberg（エ

セル・ローゼンバーグ1915～53) 夫妻よりもはるかに大物の共産主義者に違いないと考えていた。Chinese Theater のスクリーンに映し出されていたニュース映画の最後のナレーション、“A new round of hearings begins this fall.”（「次の聴聞会はこの秋に始まる」）と、“Get the Reds out of Hollywood!”（「ハリウッドから赤を追い出せ！」）が Peter の運命を暗示していた。

#### 4. *Back to the Future*（『バック・トゥ・ザ・フューチャー』1985年）

タイムトラベルした主人公Marty McFlyが1955年に出会ったアフリカ系アメリカ人青年

1985年に公開された*Back to the Future* はサイエンス・フィクション・コメディと分類される作品である。主人公Marty McFly（マーティー・マックフライ）は、友人で変わり者の科学者 Dr. Emmet “Doc” Brown（ドク）が創ったタイムマシンに乗って、1955年11月5日にタイムトラベルをする。そこで彼は、当時高校生であった自分の両親に出会う。やがて父親になる少年 George McFly（ジョージ・マックフライ）が、いじめられているのを助け、未来の母親 Lorraine（ロレイン）と恋に落ちるよう手助けをする。<sup>3</sup>

Martyはこのとき、もうひとりの人物の人生に影響を与えている。映画が始まって5分ほど経過したところで、Marty はスケートボードに乗って高校へ行く。彼が町に入ってきたとき、まず画面右端に町の名前を示す看板が現れる。そこには WELCOME TO THE CITY OF HILL VALLEY / GOLDIE WILSON / MAYOR（ようこそヒル・ヴァレイへ ゴールディー・ウィルソン市長）と書かれている。この看板によって、観客はこの映画の舞台が Hill Valley<sup>4</sup> という町であり、市長の名前は Goldie Wilson であることを知る。続いて同じく画面右手に白いワゴン車が停まっているのが見える。その荷台の後ろの窓をふさぐように選挙のポスターが貼られている。そこにはアフリカ系男性の顔写真が見え、RE-ELECT / MAYOR / “GOLDIE” WILSON（ゴールドディー・ウィルソン市長の再選を）と書かれている。その

ポスターには彼のスローガン HONESTY / DECENCY / INTEGRITY（誠実・礼儀・高潔）も見られる。これは一瞬の場面であり、そのポスターの内容は日本語字幕では説明されない。しかし、ここで2度も続けて画面右端に市長の名前が現れるのには重要な意味がある。

1955年にタイムトラベルをしたMarty が自分の父親George McFly と初めて出会うのは町の食堂 Lou's Cafe（ルーズ・カフェ）である。元気のないGeorgeに、その食堂で busboy（ウェイターの助手・皿洗い）をしているアフリカ系の青年が、「元気を出せよ」と声をかける。青年は “I'm gonna make somethin' of myself. I'm going to night school. One day, I'm gonna be somebody.”（「僕は偉くなってやるぞ。夜学に通っていつか大きなことを成し遂げる」）と言う。

Marty は彼の言葉を聴いて会話に加わり、“That's right. He's gonna be mayor”（「そうだと。市長にだってなれるよ」）とひとこと返答した。アフリカ系の市長や連邦上院議員もめずらしくない1985年に生きている Marty にとっては、自然に出た言葉であった。それを聴いた青年は、“Mayor! Now that's a good idea. I could run for mayor…Mayor Goldie Wilson. I like the sound of that.”（「市長か、それはいい考えだ。市長選挙に立候補してもいいな。ゴールドイー・ウィルソン市長か、感じよく聞こえるな」）とつぶやいた。こうして、1955年11月5日という過去に行ったMarty は、自分の住む町 Hill Valleyのアフリカ系市長誕生に力を貸していたことになる。しかし、アメリカ合衆国でアフリカ系の市民が選挙に立候補して市長に選ばれるまでは、それからまだ長い年月が必要であった。実際、George D. Carroll（ジョージ・D・キャロル 1923～）が California 州最初のアフリカ系市長としてRichmond の市長に選ばれるのは、Civil Rights Act（公民権法）が制定され選挙における人種差別が撤廃された1964年のことであった。

## 5. *Bones*（『*Bones*—骨は語る—』）第9話 “The Man in the Fallout Shelter”（「過去からのプレゼント」2005年）の1958年のアメリカ合衆国南部での恋愛事情



*Bones* はアメリカ Fox Network (フォックス・ネットワーク) が、2005年9月に放送を開始した1話完結型のテレビ番組である。日本では2006年7月から『*Bones -骨は語る-*』の題名で放送されている。Washington D.C. (首都ワシントン) にあるJeffersonian Institution (ジェファソニアン研究所) に勤める法医学者Dr. Temperance Brennan (テンペランス・ブレナン博士) は、遺跡から発掘された人骨やミイラを研究している。骨を見ればその人の死因や生前の生活も明らかにできる技術がある Temperance は、FBIに協力して身元不明の白骨死体を調べて死因を特定し、肉体的特徴からその死体の身元を突き止めることに協力している。

クリスマスの前々日、彼女のもとにFBIのSeeley Booth (シーリー・ブース) 捜査官が男性の遺体を運んでくる。それは、Washington 市内のビルの地下に、1950年代に造られ、その後閉鎖されていた核シェルター跡で見つかったという白骨化した遺体で、頭蓋骨に銃弾を受けた穴があり、右手に持ったピストルを胸の上に置いていた。自分の頭を撃ったピストルを胸に持ってくることはできない。これは自殺に見せかけた殺人だ、と Temperance は断定した。小さなスーツケースの中にあっただのは、几帳面に折りたたまれたわずかな着替え、手書きの手紙、コインなどであり、上着のポケットには、Paris 行きの航空券2枚があった。

Jeffersonian Institutionの所長で考古学者のDr. Daniel Goodman (ダニエル・グッドマン博士) が遺品の中の手紙を読む。その文字の特徴から手紙を書いたのはアフリカ系女性であろうと、自身もアフリカ系であるGoodman博士は推測する。“The letters display a combination of both block and cursive.” (「その手紙はブロック体と筆記体で書かれていた」) “It would indicate she left school in the second grade. Most white children then would attain at least an eight grade education.” (「筆記体を習う前の2年生で学校を中退してしまったのか。当時、ほとんどの白人の子供たちは少なくとも8年教育を受けていた」) と博士は言った。被害者と判明した男性Lionel Little (ライオネル・リトル) は、間違いなくCaucasian (白人) である、とTemperanceは言う。

“A white man and a pregnant black girl in 1958 Oklahoma.” (「1958年のオクラホマ州で白人男性と妊娠した黒人(字幕のママ)女性か」とスタッフの一人 Angela Motenegro (アンジェラ・モンテネグロ) が事情を悟ったように言ったとき、研究所でいちばん若い Zack Addy (ザック・アディー) は “That was bad?” (「それは悪いことだったの?」) と訊ねた。 “It was illegal.” (「違法だった」) と Goodman 博士が答えると、こんどは Dr. Jack Hodgins (ジャック・ホッジンス博士) が “In Oklahoma?” (「オクラホマ州で?」) と訊く。それには “Not just Oklahoma, here in D.C.” (「オクラホマ州だけでなく、ここワシントンD.C.でもね」) という答えが返ってきた。

Lionel のポケットに入っていた Paris 行きの2枚の航空券は、ふたりが駆け落ちをして Paris で暮らそうとしていたことを示している。1958年当時、アメリカ南部の州で白人男性とアフリカ系女性が結婚して、いっしょに暮らすことは許されなかった。このドラマが放送された2005年では、若い白人の研究者たちが、アフリカ系アメリカ人の所長の下で働くことは特別珍しいことではない。しかし、彼らのような高等教育を受けたエリートでさえも、アメリカ合衆国の1950年代の人種差別についての知識が乏しいことを露呈させている。

## 6. *Hairspray* (『ヘア・スプレー』2007年) 冒頭の1962年5月3日の *The Baltimore Sun* 紙朝刊のトップ記事

ミュージカル映画 *Hairspray* は、Maryland州 Baltimore市の町並みを空から見下ろしたシーンで始まる。俯瞰の高度が下がり、朝の活動を始めた町のざわめきが聞こえ音楽が流れ始めると、新聞配達少年が一軒の家の戸口に朝刊を置いてゆく。地元の有力紙 *The Baltimore Sun* (『ボルティモア・サン』) の1面が大きく映し出され、その日のトップニュースの見出しが拡大される。時間にしてわずか数秒のこのシーンは、この映画の時代設定が1962年5月3日であることを示し、*Hairspray* のメインテーマである、1960年代初期のアメリカ南部での人種差別の状況を語っている。その見出しは、

“Barnett Defies U.S., Bars Negro From University”である。“Barnett”とは、当時のMississippi州知事であったRoss Robert Barnett（ロス・ロバート・バーネット 1898～1987）のことである。彼は頑強な Segregationist（人種差別 [分離] 主義者）であり、アフリカ系アメリカ人に対する一切の差別をなくすことを求めた Civil Rights Movement（公民権運動）に反対して、合衆国政府及び連邦裁判所の人種差別撤廃の命令に従わなかった。

この新聞記事の見出しは、日本語字幕では「大学黒人学生の入学を拒否」となっている。これは Mississippi州生まれのアフリカ系青年James H. Meredith（ジェイムズ・H・メレディス1933～）が Barnettの母校でもある University of Mississippi（ミシシッピ州立大学）に入学を希望したとき、新聞の見出しの英語では“U.S.”（アメリカ合衆国）の2文字で表されたJohn F. Kennedy（ジョン・F・ケネディー 1917～63）大統領と連邦裁判所の命令を、Barnett 知事が“Defies”（公然と無視）して、Meredithの入学を拒否したというニュースである。<sup>5</sup>

*Hairspray*には、アフリカ系アメリカ人に対する差別の他にも、民族の違いによる差別、顔立ちや体型など容姿に関する差別などのシーンが見られる。この映画の主人公 Tracy Turnblad（トレイシー・ターンブラッド）は小柄でぽっちゃりした体型の高校生である。映画冒頭の場面で、Tracyは“Good Morning Baltimore”を歌いながら家を出て学校へ向かう。彼女は“the rats on the street”（道端のドブネズミ）にパンクずを与え、“the flasher who lives next door”（近所に住む露出狂のおじさん）や“the bum on his barroom stool”（バーにいる飲んだくれ）にも挨拶をする。そしてスクールバスに乗り遅れてしまうと、ごみ収集車の運転手さんに手を振り、荷台の上に乗せてもらう。この一連のシーンは、彼女がどのような相手であっても差別をせず接していることを表現している。

Tracyは地元テレビ局の音楽番組 *The Corny Collins Show*（『コーニー・コリンズ・ショー』）の大ファンである。その番組では Council Memberと呼ばれる高校生の男女が流行の歌を歌い、曲に合わせて踊っている。女性1名の欠員が出たとき、テレビ局で開かれたオーディションに Tracyは友

達の Penny Pingleton (ペニー・ピングルトン) とともに出かけてゆく。スタジオでは *The Corny Collins Show* のプロデューサーである Velma von Tussle (ヴェルマ・フォン・タッスル) が出演者たちにダンスのレッスンをしていた。

Velma は、その苗字にドイツ語で貴族の家名を表す“von”がついたゲルマン系の女性である。Velma が“Miss Baltimore Crabs” (日本語字幕では「ミス・ボルティモア」となっているが、正確には「ミス・ボルティモアの蟹」である) に選ばれたときの回想シーンでは、ステージ中央でバトンを持って踊っている彼女にスポットライトが当たり、選ばれなかった女性たちの姿は光の当たらない影の中にある。Velma の髪は現在よりも明るいブロンドで、まわりの女性たちの髪は brunette (ブルネット、黒髪か濃い茶髪) あるいは赤毛である。このシーンは、同じ白人のアメリカ人であっても、髪の色や民族の違いによって優劣がつけられていることを暗示している。

オーディションに来て踊っている少女たちの中にユダヤ系の女性を見つけた Velma は、“Hal Kid, she'll never get a date till Daddy buys her a new nose. I would say “Oy, gevalt” (日本語字幕では「それに鼻も整形しなくちゃ。ユダヤ系のお鼻はちょっと問題アリだから!」)<sup>6</sup>とあからさまな嫌味をその娘に聞こえるように言う。それを聴いたユダヤ系の少女は自分のことを言われていると分かって表情を変える。

Velma は、小柄で太った Tracy を自分の番組では使えないと言って意地悪な質問をする。“Would you swim in an integrated pool?” (「無差別プールで泳げる?」) と Velma が尋ねた瞬間、スタジオにいる男女は一瞬にして硬い表情になり Tracy の答えを待った。しかし、Tracy の明るい表情は変わらず、むしろますますニコニコしてハッキリとした態度で “I sure would. I'm all for integration. It's the New Frontier!” (「もちろん、泳げます。人種差別反対! 今はニュー・フロンティアの時代ですから」) と答えた。しかし、Velma は “Not in Baltimore, it isn't.” (「ここボルティモアでは違うわ」) と言い、“...so short and stout” (「背が低い上に発言がカゲキ」) と言って Tracy に帰るように言った。Baltimore 市のある Maryland 州は、The

American Civil War (南北戦争)の際の南部の最前線であり、最後の激戦地となった Pennsylvania 州のGettysburg (ゲティズバーグ)は州境を越えて数キロ北にある。南北戦争が終結した1865年からおよそ100年が経過した1960年代になっても、南部の州では、ホテルの部屋・レストランのテーブル・映画館の客席やトイレ、そしてプールなどのさまざまな場所で白人とアフリカ系とが分離されていた。<sup>7</sup>

*Hairspray*の中には、他にも白人とアフリカ系が分けられた場面がいくつか見られる。高校生たちが通学に使うバスの車内や教室の中では、白人とアフリカ系は一緒にはいない。高校のダンス会場となった体育館では、その中央にロープが張られ、白人とアフリカ系の高校生たちの踊る場所がハッキリと分けられている。そして、地元のテレビ番組 *The Corny Collins Show* では、そのテーマソングに“Nice White Kids who like to lead the way” (「ショーの主役は白人キッズ」)という歌詞があるように、歌って踊っているのは白人の男女だけであり、アフリカ系の人たちが出演するのは1ヶ月に1日設けられた“Negro Day” (字幕では「ブラック・デー」)だけであった。

## 7. おわりに 人権問題を考えるきっかけとしての映画の役割

以上の映画とテレビドラマ合計5作品のなかの、それぞれわずかな部分を概観しただけでも、その中にアメリカ合衆国の人権問題を記録した場面があることが理解できる。登場人物のひとことのせりふや、表情のわずかな変化にも差別をする側の態度が示されていたり、差別を受けた側の感情が表現されていたりしている。そして、その場面は作品のストーリー全体と深く関わっており、時には作品の主題を示したり、物語の展開を観客に予告する重要な伏線であったりもした。

外国映画を観ることは、その国の人々の生活と彼らを取り巻くさまざまな人権問題を考えるきっかけになる。本論では、アメリカ合衆国を舞台にした映画を取り上げた。世界の国々の多くの映画を観ることによって、解決されていない人権問題や、一般には知られていないような人権問題にも出会うこ

とができるだろう。

良い映画は、何度も観賞されることに耐えられる。そして観るたびごとに新しい発見がある。われわれ観客が映画館やDVDなどで観ることができるおよそ2時間の映画は、その何千何万倍もの時間と労力をかけて制作されている。そして撮影後の編集作業では特に重要なシーンが選ばれ、一般に公開される作品として完成に至る。従って、わずか数秒しか眼に留まらないシーンにも重要な意味がある。読書における多読と精読のように、多くの映画を観る多観と、ひとつの作品を何度も丁寧に観る精観をして、重要なシーンに込められた映画制作者の思いを汲み取るようにしたい。

#### 註

- 1 『日本語題名』の後に書かれた年は、その作品がアメリカ合衆国内で始めて公開された年を示す。
- 2 *The Last Samurai* はノンフィクションであり、史実に基づいた実話ではない。しかし、この作品が創作されたとき、実在した人々がモデルになったのではないかと考えられる。それは、明治政府の方針に異議を唱え、西南戦争を戦った西郷隆盛と土族たち、そして、幕末の戊辰戦争(1868~69)の際に、幕府の軍事顧問として榎本武揚(1836~1908)らとともに戦ったフランス陸軍の大尉Jules Brunet(1838~1911)や、着物を着ていたフランス海軍士官Eugene Collache(1850~1900?)である。
- 3 Marty は自分の両親になるふたりが踊る高校のダンスパーティーでギターを弾いた。アンコールに弾いた曲を気に入ったバンドのメンバーが、電話をかけて受話器をステージに向け、“Chuck! Chuck, it's Marvin. Your cousin, Marvin Berry.”(「チャック、チャック。いとこのマーヴィン・ベリーだよ」)と言った。電話の相手がChuck Berry(1926~)であり、このとき聴いたMartyの演奏から、ロックンロールのスタンダードナンバー“Johnny B. Goode”(1958)が生まれたことを暗示している。
- 4 舞台となった町 Hill Valley は Hill Billy (「ヒル・ビリー」米国南部、特にアパラチア山脈の山奥の住民、田舎者)と語呂をあわせてある。またメインストリート

- に並ぶ建物は、アメリカのどこにでもある典型的な町の風景である。
- 5 1994年公開の映画 *Forrest Gump* (『フォレスト・ガンブ 一期一会』) では、主人公 Forrest の大学時代のエピソードとして、1963年6月11日に Alabama 州知事 George Corley Wallace, Jr. (1919~98) が、University of Alabama に入学を希望した二人のアフリカ系学生の手続きを拒否して大学事務所のドアの前に立ちはだかった“Stand in the Schoolhouse Door”のニュース映像が使われている。
  - 6 Velma が言った“Oy, gevalt”はヨーロッパのユダヤ人が使う言葉であるYiddish (ドイツ語にスラブ語・ヘブライ語を交えた言語) で、驚き・不安・ショックを感じたときに口癖のように言われる。彼女の言葉を直訳すると「ねえ、見てごらん。彼女はお父さんに新しい鼻を買ってもらわなければ彼氏なんてできないわね。ああ、嘆かわしい」ともなる。
  - 7 Corney Collins に将来の夢を尋ねられたTracy は、初の女性大統領になって毎日を“Negro Day”にしたいとまで言った。2010年2月には、アフリカ系女性である Stephanie Rawlings-Blake (1970~) がBaltimore 市の第49代市長に就任している。

#### 参考DVD

- Darabont, Frank (監督) *The Majestic* 『マジェスティック』2001年 字幕翻訳: 石田泰子 ワーナーブラザーズ
- Shankman, Adam (監督) *Hairspray* 『ヘアスプレー』2007年 字幕翻訳: 戸田奈津子 ニュー・ライン・シネマ
- Yaitanes, Greg (監督) *Bones* “The Man in the Fallout Shelter” 『Bones-骨は語る』「過去からのプレゼント」2005年 フォックス・ネットワーク
- Zemeckis, Robert (監督) *Back to the Future* 『バック・トゥ・ザ・フューチャー』1985年 字幕翻訳: 戸田奈津子 ユニヴァーサル・ピクチャーズ
- Zemeckis, Robert (監督) *Forrest Gump* 『フォレスト・ガンブ 一期一会』1994年 字幕翻訳: 戸田奈津子 パラマウント・ピクチャーズ
- Zwick, Edward (監督) *Last Samurai* 『ラスト・サムライ』2003年 字幕翻訳: 戸田奈津子 ワーナーブラザーズ